

齒車 apple13 号

齒車  
apple 13 号

作・中野浩作

登場人物

イチゴちゃん      ・ ・ ・ 搾られたイチゴちゃん  
りんごちゃん      ・ ・ ・ 搾られるりんごちゃん

3号      ・ ・ ・ 搾り器

主人      ・ ・ ・ フルーツジュースの販売員

奥方

旦那

暗闇。

主人と奥方登場。

主人、奥方にジュースを渡す。

主人      「どうぞ」

奥方      「ありがとう」

奥方、ジュースを飲む。

奥方      「(違和感)・・・」

主人      「何か？」

奥方      「薄いわ」

主人      「そうですか？」

奥方      「ええ、確かに薄い」

主人      「そうですか」

奥方      「もうすぐ無くなってしまうのね」

主人      「ええ。ほとんど搾ってしまいましたから」

奥方      「困ったわ。どうにかしていただけないのかしら？」

主人      「それは、まあ、いつものように」

奥方      「農場に行かなきゃ」

主人      「奥様がわざわざ？　旦那様は？」

奥方      「あの人に話すわけないでしょう？」

主人      「けれど、あなたをここにお連れになったのは旦那様だ」

奥方      「ええ。そうよ。けどもう(あの人には)要らないの」

主人      「あなたには必要なのに？」

奥方      「もちろん」

主人      「すこしぐらい分けてあげても」

奥方

「そんなもったいないこと出来ないわ。あの人ったら、イチゴちゃんとブドウちゃんの違いもわからないの。話題に出来さえすればいいの。口にとすることさえできればいいの。周りに合わせることさえ出来ればいいの」

主人

「確かに、それはもったいない」

奥方

「でしょう？ だったら、私がおいしく飲んであげた方が、よっぽど・・・ねえ？」

主人

「わかりました。ところで、あれはどうしますか？」

奥方

「あれ？」

主人

「ええ、その、イチゴちゃん」

奥方

「種は残っているのかしら？」

主人

「まあ、イチゴちゃんにはたくさんついていきますから。けれど、まともなものはそれほど多いわけじゃない。小粒ですしねえ」

奥方

「それなら、全部は要らない。使い物になる種だけ貰うことにするわ」

主人

「毎度。でも、そうなってくると量はそれほどでも」

奥方

「なんでイチゴちゃんなのかしら？」

主人

「さあ、世間様の事は詳しくないので」

奥方

「そりゃあ、味は良いかもしれないけれど、汁も実も少なくて、その上、種まで手間が掛かるなんて。めんどくさい」

主人

「仕方がありませんよ。仕方がありません」

奥方

「・・・そうねえ、仕方ないのよねえ」

主人

「ええ。私たちが決められるものでもありませんし」

奥方

「決められたらいいのだけれど」

主人

「では、種の準備はしておきますので」

奥方

「よろしく願いますわ」

奥方、  
帰り支度。

主人

「ああ、そうそう。次は、リンゴちゃんだそうですよ」

奥方

「え？」

主人

「ですから、真っ赤な、リンゴちゃん」

奥方

「あら、そうなの？ タイミングがいいこと」

主人

「確かに。あなたに飲まれるためにあるみたいですねえ」

奥方

「ええ。私に飲まれるためにあるの」

主人

「幸か、不幸か」

奥方

「そんなこと知らないわ。だって私が全部飲んでしまうのだから」

主人

「旦那様には内緒で」

奥方

「もちろん」

主人 「では、また後日。それまでに——」  
奥方 「ええ。リンゴちゃんを取っておくわ」  
主人 「お気をつけて」

ドアの開く音。  
奥方、去る。

2

薄暗がりのどこかの部屋。  
床にぐったりと転がっているイチゴちゃん。  
イチゴちゃんに繋がれている3号。  
イチゴちゃん、自分の体から、歯車を取り出そうとしている。  
ゴソゴソ動くイチゴちゃん。

3号 「ねえ」  
イチゴ 「・・・」  
3号 「ねえ」  
イチゴ 「・・・」  
3号 「ねえ」  
イチゴ 「顔を3号に向ける」  
3号 「止めてくれる？」  
イチゴ 「(無視)」  
3号 「おい。聞こえてますかあ？」  
イチゴ 「(小さな声で) うるさい」  
3号 「別にさ、いいんだけどさ」  
イチゴ 「・・・」  
3号 「取れないから」  
イチゴ 「取るの」  
3号 「何度も言うようで悪いんだけどさ」  
イチゴ 「うるさい」  
3号 「止めて」

イチゴちゃん、歯車をいじるのを止める。

3号 「ありがとう」

イチゴちゃん、唐突に3号に襲い掛かる。

二人、しばし無言で争う。

3号、イチゴちゃんを振り払う。

イチゴちゃん、吹っ飛ぶ。ぐつたりと横たわる。

3号 「何度も言うようで悪いんだけどさ」

イチゴ 「(息を荒げている)」

3号 「止めてくれないかな」

イチゴ 「・・・返して」

3号 「無理」

イチゴ 「返して。私の」

3号 「だった。それに、もうないよ」

イチゴ 「そんなことない」

3号 「希望は捨てないの？ 悪くないけど。しんどののはあんた」

イチゴ 「・・・返して」

3号 「だから、持ってないから」

イチゴ 「・・・誰が？」

3号 「さあねえ、あたしが知ってりやあ (何かに気が付いて)・・・ああ、別に変わんないわ。残念」

イチゴ 「(ゆっくりと体を起こす)」

3号 「しんどのい？」

イチゴ 「・・・うん」

3号 「そりやあねえ。しんどのいよねえ」

イチゴ 「あと・・・(どのくらい?)」

3号 「どうだろうねえ。外のことなんてわかんないし。あんたのことともよくわかんない。っていうのは嘘か。(イチゴちゃんをまじまじと見て) うーん、経験から言わせてもらおうと・・・」

イチゴ 「(3号を見る)」

3号 「あと、一、二回ぐらいじゃない？」

イチゴ 「・・・」

3号 「へこまないでね」

イチゴ 「かわいそう？」

3号 「そうでもない。だって、初めてじゃないし。初めてじゃないし、かわいそうっていうのも、なんかちがくない？」

イチゴ 「そう」

3号 「あ、ごめん。かわいそがってほしかった？」

イチゴ 「別に」

3号 「嘘だあ。かわいそがって欲しかったんでしょお？ じゃなかったら聞かないでしょ？ かわいそう？って。ね？ 正直に」

イチゴ 「言ったらどうなるの？」

3号 「(にっこり笑って) かわいそがってあげる」

イチゴちゃん、再び3号に襲い掛かる。

再び無言で争う二人。

と、ふわふわな格好をしたりんごちゃん登場。

りんご 「きらん☆ だいま登場、りんごちゃんだよ♪」

イチゴ 「・・・りんごちゃん・・・？」

りんご 「りんごちゃんはかわいそうなりんごちゃん。とってもおっきなぼかぼかするお家で、へいわなまいにちをおくっていたのに、とっつぜん、こんなところに。(誰かに) ここはあ、どこでゝすかあ？」

イチゴ 「りんごちゃん」

りんご 「あれあれ？ りんごちゃんを呼ぶ声がするよ。だれだれ？ こんなにくらあいところで、りんごちゃんを呼ぶのはだあれ？」

イチゴ 「りんごちゃん、私」

りんご 「どこだろう？ こんなにくらあいと、何にも見えなくって、りんごちゃん困ってます。こまったなあ・・・」

イチゴ 「私」

りんご 「ひょっとして、ようせいさんかも！ 妖精さんとなら、りんごちゃんお話したことあるよ♪ ようせいさん、どこでゝすかあ？」

イチゴ 「(力の限り) りんごちゃん！」

りんご 「わあ！ なんておっきなおこえ！ りんごちゃんびつくりしちゃった！ ドキドキ。(周りを見回す) キョロキョロ、うゝん、暗くてよく見えないよお。妖精さん、どこですかあ？」

りんごちゃん、周囲を見回す。

と、イチゴちゃんと目が合う。

りんご 「・・・あ、イチゴちゃんだ！」

イチゴ 「りんごちゃん」

りんご 「いっけな〜、イチゴちゃんはお姉ちゃんって呼ばないといけないんだった。てへぺろん☆」

イチゴ 「本当に、りんごちゃん？」

りんご 「そうだよ！ りんごちゃんはりんごちゃんなの！ イチゴちゃんお姉ちゃんはこんなところで何をしているの？」

イチゴ 「(3号に) なんで？」

3号 「流行りでも変わったんじゃない？ ああ、違うか。あんたの代わりかもね」

イチゴ 「代わり？」

りんご 「違うよ！ りんごちゃんはりんごちゃん。イチゴちゃんお姉ちゃんはイチゴちゃん。みんな違って、それがいい☆」

りんごちゃん決めポーズ。

暗転。

歯車の回る音。

3

暗闇の中、二人の話し声。

主人 2 「いいりんごちゃんだ」

旦那 「だろう？」

主人 2 「艶も、色もいい」

旦那 「手間ひまかけたからねえ」

主人 2 「うん。これなら」

旦那 「いいのが取れるだろう？」

主人 2 「ええ。申し分ないかと」

旦那 「種はどうだろう？」

主人 2 「ご期待なさって構わないですよ。これなら」

旦那 「そうか。そうこなくっちゃ」

主人 2 「種、そんなに大事ですか？」

旦那 「そりゃあ、あんた、大事だろう？ みんなそうだろ？」

主人 2 「残念ながら、世辞には疎くて」

旦那 「こんな商売やってるんだから、多少は世間様のこと知っておいても損はないと思うけどねえ」

主人 2 「ご忠告痛み入ります。でも、ちっとも興味が持てなくて」

旦那 「そうかい？ まあ、こつちにしてみりゃあ、搾ってさえくれりゃあ、なんでもいいんだが」

主人2 「ええ。・・・ああ、そうそう」

旦那 「なんだい？」

主人2 「これ」

主人2、旦那にジュースを差し出す。

旦那 「おお、ありがとう」

主人2 「出がらしみたいなんです。味はかなり薄いかと」

旦那 「構わねえよ。そんなことは知ってるから」

旦那、ジュースを飲み干す。

主人2 「ね？」

旦那 「ああ、薄い。けど」

主人2 「ええ、お気になさらず」

旦那 「助かるねえ。いつも助かるよ」

主人2 「種はどうします？」

旦那 「どれくらい取れそうかね？」

主人2 「それほど。イチゴちゃんの種はたくさんあっても、小粒で、その上弱くてね」

旦那 「いくらか取れるだけで構わないさ。あればいいんだから」

主人2 「それでは、できる限り頑張りますよ」

旦那 「頼んだよ」

主人、出て行こうとする。

主人2 「奥様にも、よろしくお伝えください」

旦那 「・・・なんで？」

主人2 「ああ、これは失礼」

蝋燭の明かりが灯る。

決めポーズのままのりんごちゃん。

そのりんごちゃんをマジマジと見つめている3号。

3号 「（イチゴちゃんと見比べて）あんまり似てないねえ」

りんご 「そんなことないよ！ りんごちゃんとイチゴちゃんお姉ちゃんはそっくりなんだから！」

3号 「お姉ちゃんでよくない？」

りんご 「だめだめ、人の名前を呼ぶ時は、ちゃんとした名前で呼ばなきゃいけないんです！」

3号 「(なんだか気圧されて) あ、そう」

りんご 「あなたは誰さんですか？ (3号の姿を見て) ロボットさん？」

3号 「うーん。微妙に違うんだけどね。歯車だよ。歯車3号」

りんご 「ロボット歯車3号さん」

3号 「長いな。とりあえずロボットは要らないから。ロボットじゃないし。3号でいいよ。あ、歯車さんでもいいな。(イチゴに) どっちがいいと思う？」

イチゴ 「(3号を睨みつける) いっ？」

3号 「(ふざけてイチゴを指差して) せっかちさん」

イチゴちゃん、飛び掛ろうとするが、体力がなく、倒れる。

りんご 「(イチゴに駆け寄る) イチゴちゃんお姉ちゃん、大丈夫!？」

イチゴ 「うん・・・うん、大丈夫」

りんご 「良かった。(3号に) イチゴちゃんお姉ちゃん大丈夫だって」

3号 「良かったねえ。お姉ちゃん大丈夫で」

イチゴ 「(3号を睨みつつ) りんごちゃん、誰に？」

りんご 「誰に？」

イチゴ 「誰が？」

りんご 「誰が？」

イチゴ 「取った人」

3号 「(何故か楽しげ) あ、それ聞くの？」

イチゴ 「うるさい！」

りんご 「ダメだよ、イチゴちゃんお姉ちゃん、そんな言葉を使ったらダメなんです」

イチゴ 「りんごちゃん、よく聞いて。大事なことなの」

りんご 「うん。りんごちゃん、イチゴちゃんお姉ちゃんの話、よく聞くよ」

イチゴ 「誰に取られたの？」

りんご 「りんごちゃん、取られたの？」

イチゴ 「そう、りんごちゃんは、取られたのよ」

3号 「(楽しそう) 無駄だよ」

イチゴ 「誰があなたをもぎ取ったの？」

りんご 「誰が？ りんごちゃんを？」

イチゴ 「そう。取られたんでしょ？」

りんご 「りんごちゃんを取られたんだ！」

3号 「だから、無駄だって」

イチゴ 「誰に取られたの？」

りんご 「誰に？」

3号 「誰でしょう？」

イチゴ 「りんごちゃん！」

りんご 「いちごちゃんお姉ちゃん！」

3号 「無駄でしょ。イチゴちゃん」

イチゴ 「(りんごちゃんに) 思い出してよ！」

3号 「無駄だよ、イチゴちゃん。自分で覚えてないのに、りんごちゃんが覚えてるわけないでしょ？」

イチゴ 「うるさい」

りんご 「イチゴちゃんお姉ちゃん——」

イチゴ 「うるさい！ 何で？ 何で、覚えてないのよ？ 大事なことなの。すごく大事なことなの。ねえ、りんごちゃん」

りんご 「うん！ りんごちゃんだよ！」

イチゴ 「(よくわからない顔)・・・そう。りんごちゃんね」

3号 「残念。残念だねえイチゴちゃん」

イチゴちゃん、その場にうずくまる。

りんご 「あれあれ？ イチゴちゃんお姉ちゃん、ロボット歯車3号さんと赤いコードで繋がってるよ？」

3号 「だから長いって、3号でいいよ。あと、それ触っちゃダメ」

りんご 「わかった、3号さん。コードには触りません」

3号 「その辺の歯車とか、機械も触っちゃダメね」

りんご 「わかりました！」

3号 「りんごちゃんはいいい子だね」

りんご 「ホント！？」

3号 「うん。りんごちゃんはとってもいい子だ」

りんご 「りんごちゃんはとってもいい子！ 3号さんに褒めてもらいました☆ そして、イチゴちゃんお姉ちゃんに久しぶりにあいました！ イチゴちゃんお姉ちゃんは何んだかとても疲れていて、りんごちゃんはすごく心配です！」

3号 「お姉ちゃん想いで大変よろしい。りんごちゃんに花丸をあげよう」

りんご 「やった！ りんごちゃん花丸もらいました！」

りんごちゃん決めポーズのまま静止。

3号 「ホント、りんごちゃんはいいい子だ」

イチゴ 「(3号に) ねえ」

3号 「ん？ どした？」

イチゴ 「いつ？」

3号 「いつ？ もう残ってないよ。何にもね」

イチゴ 「残ってる。ここに」

3号 「何があるの？ イチゴちゃんには何があるのさ？」

イチゴ 「・・・種」

3号 「どれどれ？ (イチゴちゃんをマジマジと見る) ・・・ああ、ホントだ。あるねえ、種」

イチゴ 「種はあるわ」

3号 「そう。でも、それはもうイチゴちゃんのじゃないんだなあ」

3号、どこから袋を取り出す。

3号 「こいつはもう、イチゴちゃんのじゃないんだよ」

イチゴ 「返して」

3号 「返さない。こいつも大事なもの・・・らしいよ。よく知らないけど」

イチゴ 「返してよ。私の、私の種」

3号 「返さない。返せない。帰れない。何も戻らないよ。イチゴちゃん。イチゴちゃんは今もう、腕ぎ取られちゃったから、腕ぎ取られるためにいたんだから、しょうがないよね。イチゴちゃんは何にも心配しなくてもいいよ。おっつけ用済みだから。良かったね」

イチゴ 「(3号を見ている)」

3号 「そんな顔しない。残念がらない。安心しなよ。みんな似たようなモンなんだからさ」

不意に、歯車の音。

イチゴ、ビクツと起き上がる。

3号 「来たねえ。これで最後かな」

イチゴ 「嫌」

3号 「痛くないようにしてあげるからさ。あたしの腕、信用してよ」

イチゴ 「どうなるの？」

3号 「さあ？ 皮でも残ってるといいね。あ、でも、そうしたら、もう一回やらなき  
やかか。それはそれで嫌だよねえ」

イチゴ 「私の次は、りんごちゃん？」

3号 「そうだね」

イチゴ 「・・・欲しい」

3号 「は？」

イチゴ 「りんごちゃんが欲しい」

3号 「違うだろ？ りんごちゃんじゃない」

イチゴ 「なんでもいい。私は——」

歯車の音、大きくなる。  
暗転。

4

歯車の音と共に何らかの機械音。

主人 「3号、首尾はどうだい？」

3号 「上々だよ」

主人 「そいつはよかった」

3号 「イチゴちゃんが搾り終わったら、じきにりんごちゃんに取り掛かるよ」

主人 「早いところそうしてくれ。イチゴちゃんはどうもなあ」

3号 「それ、いつも言ってる」

主人 「そうか？ (何かを思いだして)・・・そうかもなあ」

3号 「ブドウちゃんもバナナちゃんもマンゴーちゃんもチェリーちゃんも」

主人 「そうだなあ。まあ、どれでも一緒さあ」

3号 「確かに。一緒だからねえ」

主人 「あ、そうだ。種」

3号 「種？」

主人 「どれぐらい取れそうだい？」

3号 「期待するほどには」

主人 「そうかあ、やっぱりなあ。ふうん。困ったなあ」

3号 「口だけだね」

主人 「そんなことねえよ？ お客様満足度つてのは、大事だ」

3号 「関係ないでしょ」

主人 「まあ、確かに」

3号 「みんなこぞつてやってくる。揃いも揃ってやってくる。多分、ずーっと」

主人 「食うに困らんのはいいことだ」

3号 「あたし、何にも食べないんだけど？」

主人 「お前のことじゃない。俺のことだ」

3号 「あ、そ」

主人 「なんにせよ、早くしてくれ」

3号 「あんまりこき使うと、壊れちゃうよ」

主人 「別に構わんよ。お前なんてまた作ればいい」

3号 「ひどいねえ」

主人 「当然だろ？ 代わりなんていくらでもいるんだ。お前も、イチゴちゃんもりんごちゃんも」

3号 「確かに」

主人 「じゃあ、頼んだぞ」

3号 「・・・あれ？」

主人 「どうした？」

3号 「ダメだ」

主人 「あ？」

唐突な異音。

何かが壊れる音。

5

床に倒れているイチゴちゃん。

それを眺めているりんごちゃん。

崩れている3号。コード類はりんごちゃんに繋がれている。

イチゴ 「ちようだい」

りんご 「飲まれちゃったの」

イチゴ 「ちようだい」

りんご 「食べられちゃったの」

イチゴ 「ちようだい」

りんご 「搾られたの」

イチゴ 「ちようだい」  
りんご 「取られちゃったの」  
イチゴ 「返して」  
りんご 「何を？」  
イチゴ 「汁を。実を」  
りんご 「種？」  
イチゴ 「種を返して」  
りんご 「種を私に返して下さい？」  
イチゴ 「種を私に返して下さい」  
3号 「無理だよ」  
りんご 「戻らない」  
3号 「二度とねえ」  
りんご 「流れ流れたイチゴちゃん」  
3号 「潰れ潰れたイチゴちゃん」  
りんご 「どんなにどうしてどうこうしても」  
3号 「取って取られてもぎ取られ」  
りんご 「飲んで飲まれて飲み込まれ」  
3号 「食って食われて食い込んで」  
りんご 「種は私に返らない」  
イチゴ 「ちようだい」  
りんご 「何を？」  
イチゴ 「りんごちゃんの種」  
りんご 「無理よ」  
イチゴ 「なんで。私にもあったの」  
りんご 「でも、無いの」  
イチゴ 「ちようだい」  
3号 「無理だよ」  
イチゴ 「(棒読み) きらん☆ ただいま登場イチゴちゃんだよ」  
りんご 「(棒読み) きらん☆ ただいま登場りんごちゃんだよ」  
イチゴ 「ただいま登場イチゴちゃんだよ！」  
りんご 「ただいま登場りんごちゃんだよ！」  
3号 「あきらめなよ、イチゴちゃん！」

エンジン音。

歯車の音が再開する。

イチゴ 「どこにあるの？ 私の種」

りんご 「どこにもないよ、イチゴちゃんの種」

3号 「イチゴちゃんは、どこにもいないよ」

りんご 「3号さん」

3号 「残念、もう3号さんじゃないんだ。壊れちゃってね」

りんご 「じゃあ、あなたは誰さん？」

3号 「さあ？ 誰だろうねえ」

りんご 「りんごちゃんも取られちゃうの？」

3号 「もちろん。りんごちゃんもイチゴちゃんのようになるんだ」

りんご 「そっかあ、しょうがないね」

3号 「お、りんごちゃんは物分りがいいね。花丸をあげよう」

りんご 「やったり、りんごちゃん花丸貰いました！」

3号 「けど、咲かない」

りんご 「知ってるよ。もう、咲くこともない」

3号 「理由もないし、場所もないし」

りんご 「誰が搾ってくれるの？」

3号 「さあねえ。代用品が出来るまで、ちょっと待っててよ」

りんご 「残念」

3号 「腐らないようにね。虫食いになったら、要らないって言われちゃうから」

りんご 「わかった。でも、どうすればいいのかな？」

3号 「腐らないために？ そうだなあ、キラキラしてればいいんじゃない？」

りんご 「わかった。きらん☆ ただいま登場、りんごちゃんだよ！」

6

主人、立ち上がる。

奥方、旦那、立ち上がる。

主人 「ちよいと、面倒なことになりましたねえ」

奥方 「なんですの？」

主人 「歯車がいかれちゃって」

旦那 「そいつは大丈夫なのかい？」

主人 「新しいのを作るのに、ちよっと時間がかかりそうで」

奥方 「・・・貰えないのかしら？」

主人 「しばらくは」

旦那 「種は？」  
主人 「いやあ、大変申し訳ないんですが・・・」  
奥方 「何？」  
主人 「勢い余って、ひき潰ししまったようで」  
旦那 「全部？」  
主人 「ええ、全部」  
奥方 「それは困るわ」  
旦那 「どうにかならないのか？」  
主人 「どっちを？」  
奥方 & 旦那 「両方」  
主人 「ああ、種の方はどうにもなんのですが、汁なら、どうにか」  
奥方 「じゃあ、くださいな」  
旦那 「しかし、どうやって？ 歯車は壊れているんだろう？」  
主人 「まあ、どうにかなるならって程度です。味も匂いも保証はしません」  
奥方 「仕方がないわ」  
旦那 「だから、どうやって搾るんだ？ 歯車も、材料もないんだろう？」  
主人 「材料があるので、搾りは、手作業で」  
奥方 「方法なんてどうでもいいから、早く」  
旦那 「しょうがない。早くしてくれ」  
主人 「では、お二方、このコードと歯車を、飲み込んでください」

歯車の音。

終